季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

夏号

2004

6,7,8月

「空洞化」を乗り切る 上越地域の工業的発展

新しい時代の地域づくりに向けて

―上越地域の活性化への取り組み―

巻頭エッセイ◉このまちのこと

グァンバレ、駅前商店街

新潟県初の登録文化財

万内川石積み堰堤群・日影沢床固工群

◉ ひろば ◉

巴御前を守った光源寺の祖・

堀徳兵衛

【カメラの眼】

【義経記…笈探し…安宅…勧進帳】

季刊 直江の津 第13号 夏号
2004—6・7・8

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
グァンバレ、駅前商店街　橋本秋子　3

■「空洞化」を乗り切る
上越地域の工業的発展　鈴木敏紀　4

■上越なおえつ信金倶楽部講演会から
新しい時代の地域づくりに向けて
—上越地域の活性化への取り組み—　村山秀幸　8

■寄稿
ライオンはみがき　創業者小林富次郎　久保田好郎　13

■新潟県初の登録文化財
万内川石積み堰堤群・日影沢床固工群　後藤正弘　16

■ひろば
巴御前を守った光源寺の祖・堀徳兵衛　三田村優　24

■カメラの眼　22

■読書びと　夫の右手　文・香月婦美子　28

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



昭和63年1月の不慮の火災による本堂、五智如来の焼失以来15年、宿願であった本堂の再建と五如来の復興がようやく成り、平成16年4月18日、「入仏法要」が行われた。

当日、法要があった後、本堂前で修験者による柴燈護摩が修され、修験者の「火渡りの行」に続いて一般の人びとも無病息災と、再び祝融に災いされることの無いよう祈りつつ火渡りを行った。

五智国分寺は、宗祖親鸞聖人配流の聖地として宗派を超えて訪れる人が多く、当日も北陸から訪れた多数の門徒が手を合わせていた。

♣巻頭エッセイ
橋本秋子さんのこと

昭和22年　直江津生まれ　東京在住
飲食店ウォッチャー
「週刊新潮」「日経流通新聞」「新潟日報」「日刊ゲンダイ」などに飲食店コラムを執筆した後、現在、夕刊紙やスポーツ紙に飲食店紹介記事を連載中。
居酒屋、寿司店、焼き肉ハウス、ラーメン屋、イタリアン、アジアン料理、屋台、立ち飲み酒場など、これまでにクリアした取材件数は約22000店。

グァンバレ、駅前商店街

橋本秋子

平成11年5月。母マサノが隠居用として使っていた中門前の〝山の家〟で姉と二人ささやかながらも〝母を忍ぶ会〟を設けた。ひとしきり昔話で盛り上がった後である。叔母の一人がふとつぶやいた。

「昔はね直江津って呼び方ひとつで家の格というか職業が分かったのよね。旦那さんが医者や学校の先生の場合は奥さん、豆腐屋はオッカァだったもの」

「うちの母は何て呼ばれてたの」

「ネェさんの場合はカアちゃん。カクロコは魚屋じゃなくて海鮮問屋だったからね。ちょっとだけ格式が高かったんだよ」

カァちゃんか、どこか暖かみがあってなかなかいいじゃないの。我が家が商売していたのは、直江津駅から直線で1分～2分のところ。海鮮問屋なんていえば聞こえはいいものの、缶詰も売ればあら巻サケも捌く。惣菜もつくる。今から思えば一種のコンビニエンスストアだった。当時父はバイクにまたがり老人ホームや学校にカァちゃんが揚げた天ぷらを段ボール箱で届けていたもんである。かき揚げ天ぷらが3つ10円の時代だった。お下がりや継ぎ当てが当たり前で、どこの家も貧しいけれどそれでもお隣りさん同士が助けあい、支え合っていた。

あの頃が直江津駅前商店街の黄金期だったのかもしれない。旅館というより旅籠といった風情の宿があり、純喫茶、豆腐屋、果物屋に団子屋、歯医者、床屋、お菓子屋、銭湯、時計屋などが連なっていた。「来々軒」のラーメンばかりか「小林」の〝かき氷〟まで出前で食べた覚えがある。昼といわず夜といわず曙エリアはいつも活気に満ちていた。

それが今やどうだ見る影もない。年に一度、帰省する度にシャッターの数が増え、ゴーストタウンと化している。列車で降りた旅人にとって駅前こそその町の顔なのに。車時代の到来に置いてきぼりをくってしまったのか。後継者の問題も確かにあるだろう。だからといってこのまま指をくわえているだけでいいの。

品のよさが城下町・高田なら元気が取り柄の直江津じゃないですか。いつまでもショボくれてないでそろそろ旗振りアンちゃんの一人も出てきてよ。カァちゃんやオッカァも巻き込んでもう一度賑わいのある直江津駅前商店街を取り戻して欲しい、な。

（飲食店ウォッチャー……。）

「空洞化」を乗り切る 上越地域の工業的発展

上越教育大学教授 鈴木敏紀



はじめに

長期不況下にある日本経済において新潟県及び上越地域の経済はどのような具体的状況にあるのか。また特に日本経済において「産業空洞化」が問題視されているのであるが、新潟県ではその「空洞化」の状況はどうなのか。こうした問題を明らかにすることで、県下の地域経済の特徴が明らかにされるであろう。

本稿では、新潟県の4大経済圏を取り上げ、その地域的生産力を比較することでそれぞれの経済圏及び上越地域の経済的特質を明らかにしようとするものである。

新潟県の4大生活圏の産業状況

新潟県の民営の事業所数と従業者数を4大生活圏別で見ると、三条・燕圏及び長岡圏の落ち込みが大きく、ついで新潟圏となっている。すなわち新潟県では中越地方の産業的衰退が最も著しく、ついで新潟圏地域を中心とする下越地方であることがうかがえる。

県内産業の最も比重の高い新潟・長岡・三条・燕圏地域が深刻な経済的地盤沈下を引き起こしており、そのことが本県における産業空洞化の深刻な要因となっている。また上越・新井頸南圏地域において経済的地盤沈下は比較的軽微である。

新潟県内の4大生活圏地域における製造業

表1.　新潟県の4大生活圏における民営事業所数及び従業者数の推移

	事業所数（増加率%）		従業者数（増加率%）	
年　　次	平成8年	平成13年	平成8年	平成13年
新　潟　圏	44640	41760（−6.5）	382920	364144（−4.9）
三条・燕圏	19942	18230（−8.6）	136562	126226（−7.6）
長　岡　圏	22232	21014（−5.5）	182065	171976（−5.5）
上越・新井頸南圏	14411	13582（−5.7）	113275	108444（−4.3）

資料：『新潟県の事業所―平成13年事業所・企業統計調査報告書―』新潟県総合政策部
なお、圏内の市町村は以下の通りである。



表2.　新潟県の4大生活圏における製造業の
事業所数・従業者数・付加価値額（億円）の推移及び増加率（%）

	事業所数		従業者数		付加価値額	
年　次	平成8年	平成13年	平成8年	平成13年	平成8年	平成13年
新　潟　圏	2966	2656（−10.5）	56908	49431（−13.1）	5028.6	4187.6（−16.7）
三条・燕圏	6188	5268（−14.9）	55449	47630（−14.1）	4056.5	3155.5（−22.2）
長　岡　圏	3410	2789（−18.2）	53205	45811（−13.9）	3721.0	3409.6（−8.4）
上越・新井頸南圏	995	909（−8.6）	26179	23323（−10.9）	2826.2	2775.3（−1.8）

資料：『にいがた県の工業』（各年版）

＊**新潟圏**：新潟市、新津市、白根市、豊栄市、阿賀野市（安田町、京ヶ瀬村、水原町、笹神村）、小須戸町、横越町、亀田町、巻町、西川町、黒埼町（旧）、味方村、潟東村、月潟村、中之口村
＊**三条・燕圏**：三条市、加茂市、燕市、岩室村、弥彦村、分水町、吉田町、田上町、下田村、栄町、寺泊町
＊**長岡圏**：長岡市、小千谷市、見附市、栃尾市、中之島町、越路町、三島町、与板町、和島村、出雲崎町、山古志村、川口町、小国町
＊**上越・新井頸南圏**：上越市、安塚町、浦川原村、大島村、牧村、柿崎町、大潟町、頸城村、吉川町、清里村、三和村、名立町、新井市、妙高高原町、中郷村、妙高村、板倉町

の状況を比較してみると、県央の三条・燕圏地域が従業者数及び付加価値額において最も落ち込みが著しく、事業所数では長岡圏地域が最も大きな減少を示している。新潟圏地域は付加価値額の落ち込みが長岡圏地域のそれよりかなり大きな落ち込みを示している。上越・新井頸南圏地域はいずれの項目においてもその減少率は他の3地域より小さく、付加価値額は他の地域の大幅な落ち込みに比較してわずか1・8パーセントほどの落ち込みでしかない。

新潟県における「産業空洞化」現象は、県央の三条・燕圏及び長岡圏の中越地方と新潟圏の下越地方において著しく、新潟県の工業生産力の大きな比重を占めている両地域で生じていることがわかる。平成13年の製造品出荷額を生活圏別構成比で見ると、新潟圏は22・5パーセント、長岡圏は19・3パーセント、三条・燕圏は17・7パーセント、上越・新井頸南圏は13・8パーセントである。これら4大生活圏全体だけで73・3パーセントを占めている。

県内13の生活圏（新井頸南圏を上越圏に含める）における製造品出荷額の落ち込みの大きさだけを見ると中越地方の小出圏・六日町圏・柏崎圏、下越地方の岩船圏がかなり大きな落ち込みを示しているが、これらの県内における構成比はほんのわずかなものでしかない。したがってこれらの弱小工業生産力の生活圏において大きな落ち込みを示しても県全体への影響力はそれほど大きなものではない。すなわち4大生活圏の工業生産力があわせて73・3パーセントを占める中で、落ち込みの



大きいこれら4つの弱小生活圏における工業生産力の構成比はあわせて10・4パーセントでしかないのである。(『にいがた県の工業』)

したがって県内の「産業空洞化」現象を見る場合、4大生活圏を比較してその程度を考察することが肝要となるのである。

そこでこの4大生活圏におけるそれぞれの上位産業を付加価値額の大きさで見てみると次のようである。

三条・燕圏地域の主な産業は、第1位が金属製品で、その製造業全体に占める割合は平成13年において36・0パーセントである。第2位は一般機械(同16・2%)、第3位は電気機械(同9・9%)である。

長岡圏地域の主な産業は、第1位が電気機械(同22・5%)、第2位が一般機械(同19・2%)、第3位が食料品(同12・6%)である。

新潟圏地域の主な産業は、第1位が食料品(同25・4%)、第2位が金属製品(同10・9%)、第3位が化学(同10・3%)である。同様の割合で出版・印刷とパルプ・紙が続く。

上越・新井頸南圏地域の主な産業は、第1位が電気機械(同35・8%)、第2位が化学(同24・1%)、第3位が食料品(同5・8%)である。

三条・燕圏地域の主産業が大きな落ち込みを示していることがこの地域の「産業空洞化」を著しいものにしているのである。すなわち金属製品の落ち込みは平成8年から13年の期間に18・3パーセント、一般機械は21・2パーセント、電気機械は実に50・7パーセントであった。長岡圏地域における同期間の落ち込みは上位3位までの主要産業には見られず、第4位の金属製品が10・9パーセントであった。新潟圏地域では、食料品が13・4パーセント、金属製品が14・3パーセント、出版・印刷が2・7パーセントの落ち込みを示している。

これに対して上越・新井頸南圏地域における第1位の産業である電気機械においてはその付加価値額は平成8年から13年に掛けて40パーセント近くも増大している。この部門においては事業所数及び従業者数は大幅に減少したが、規模の経済性を生かした形で生産性を上げ、業績を上げたことが看取される。この地域の第2位の産業である化学においては事業所数及び従業者数がともに大きく増大し、付加価値額においては実に二倍近い伸びである。またこの化学部門の現金給与総額は25パーセントも大幅な増加を示し、したがって電気機械と化学の両部門で上越・新井頸南圏地域の産業空洞化の阻止要因を形成していると言っても過言ではないであろう。(『にいがた県の工業』)

付加価値額の指数が平成5年を100として平成13年に70台にまで落ち込んだ部門を地域別で見ると、表3でまとめて示されているように新潟圏と三条・燕圏が9部門と最も多く、ついで長岡圏の7部門、上越・新井頸南圏の5部門となっている。また共通して落ち込んだ部門は木材・家具・非鉄金属の3部門であるが、繊維部門の減少は著しく、50パーセントを大きく割り込んだ。しかし上越・新井頸南圏におけるその付加価値額の落ち込みは比較的小さくマイナス13パーセントであった。またこれらの落ち込んだ部門を注意深く見ると、三条・燕圏では付加価値額が上位にある部門、すなわち電気機械(マイナス35%)をはじめ、鉄鋼(マイナス23%)、プラスチック製品(マイナス24%)、一般機械(マイナス15%)そして金属製品(マイナス14%)の落ち込みが著しい。新潟圏では最上位の食料品がマイナス12パーセントの減少、第2位の金属製品がマイナス26パーセントの減少を示している。長岡圏は中上位から下位の部門が落ち込み、上越・新井頸南圏は中下位の部門が落ち込んだ。これらの要因が、各地域経済の地盤沈下の程度に影響したことは疑い得ないであろう。

同様に付加価値額が100以上の指数を示して

いる部門を地域別で見ると、表4でまとめられて示されているように、三条・燕圏がわずか出版印刷と輸送機械の2部門だけである。新潟圏と長岡圏はともに6部門、上越・新井頸南圏はそれよりひとつ多い7部門であり、これらの部門のうち化学、電気機械、金属製品、そしてプラスチック製品は上越・新井頸南圏にとって上位に属する部門である。

県内の4大生活圏を「産業空洞化」という観点で見ると、県央の三条・燕圏が最も著しい減少を示しており、ついで長岡圏・新潟圏となっている。すなわち県内産業の「空洞化」は県内経済にとって中心的な担い手地域となっている県央の三条・燕圏及び長岡圏、そして新潟圏の地域において著しく起こっている現象といえる。このことが新潟県経済全般に地盤沈下という縮小的再生産構造を形作っている。

表3. 県内4大生活圏において付加価値額の指数が平成5年の100から平成13年にかけて70台に落ち込んだ産業部門

新潟圏	三条・燕圏	長岡圏	上越・新井頸南圏
飲料	飲料	繊維	衣服
繊維	繊維	衣服	木材
木材	木材	木材	家具
家具	家具	家具	非鉄金属
窯業土石	化学	窯業土石	精密機械
非鉄金属	プラスチック製品	鉄鋼	
金属製品	鉄鋼	非鉄金属	
一般機械	非鉄金属		
輸送機械	電気機械		

表4. 県内4大生活圏において付加価値額が100以上に増大した産業部門

新潟圏	三条・燕圏	長岡圏	上越・新井頸南圏
パルプ紙	出版印刷	食料品	パルプ紙
出版印刷	輸送機械	飲料	化学
化学		化学	プラスチック
プラスチック		プラスチック	窯業土石
鉄鋼		一般機械	金属製品
電気機械		電気機械	電気機械
			輸送機械

総括

新潟県における産業空洞化の現況は、中越地方、特に三条・燕地域、長岡地域、そして下越地方の、それも新潟県の経済的中心地である新潟圏地域において著しく生じていることがわかった。その地域ではそこの主要産業である金属・機械器具製造業において大きな落ち込みを示しているのであるが、その背景に国内経済の不況を原因とした販売不振による倒産、あるいは大手親企業の経営不振の影響による下請関連企業の倒産、あるいはまた銀行の「貸し渋り」、「貸し剥がし」などによる倒産など、いわゆる不況型倒産が背景にあることは疑い得ないであろう。

この地域の社会的生産力を引き上げるためには何よりも新技術の導入による技術革新が推進されなければならないのであるが、高度の技術者や開発資金に慢性的に不足しているこれらの企業にとっては、困難な課題である。この困難な課題を解決する方策として「産業クラスター」計画なるものがある。この計画は、経済産業省が、産学官連携によって技術開発を推し進め、中堅・中小企業の技術的集積を推し進め、国際競争力を強化し、地域経済の活性化を図ろうという産業政策である。

この計画は、全国各地域の中堅・中小企業が大学等各種研究機関と連携し、技術革新を推進することを支援することとなっている。本県においては国公私立大学が15あり、中堅・中小企業が積極的に大学等各種研究機関と連携し、技術革新を推進するには恵まれた環境にあるといえる。各地域の中堅・中小企業はこの環境を生かし、今日の激烈な国際競争の中で生き残っていかなければならないであろう。

＊4頁写真提供（株）第一印刷所

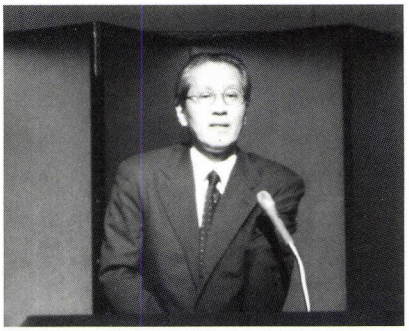
■一九四三年新潟市生れ／新潟大学人文学部卒・東京教育大学大学院博士課程修了／専攻　経済原論・経済政策論

●上越なおえつ信金倶楽部講演会から

新しい時代の地域づくりに向けて

―上越地域の活性化への取り組み―

新潟県上越地域振興局長　村山秀幸



本稿は平成一六年三月　上越なおえつ信金倶楽部における講演を編集部において抄録したものである。
なお、講演当時は新潟県上越地域振興事務所であった。

私は大潟町に生れて、十八歳まで育ったこの地域には思い入れが大きなものがある一人です。幸いに良き先輩、良き友人知己に恵まれ、土地感もありますので、何かできるかなと思って、昨年春に三十年ぶりに新潟から戻りましたが、あっという間の一年間、何をしてきたのかなと振返っている昨日今日です。

上越地域振興事務所は、今年の四月から上越地域振興局として全ての機関を束ねる組織になりますので、この地域における県の役割と現状、そして〈地域づくり・まちづくり・人づくり〉という要素をどういう視点でとらえ、地域資源や人の力を活かしながら、地域の活性化に向けて取り組もうと考えているかをご報告させていただきます。

上越地域とは

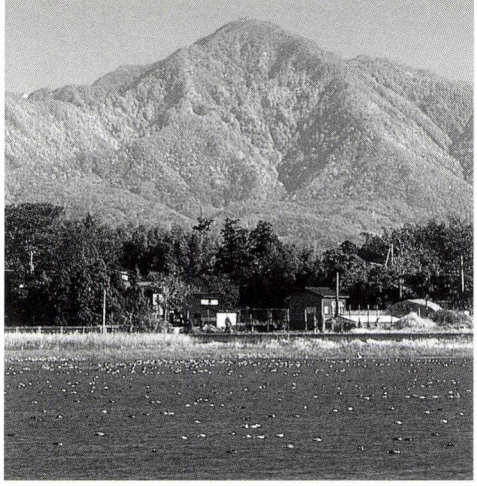
米山から西を一区切りにして上越地域といいますが、糸魚川まで含めた上越圏域全体を見ると、ブナ林の新緑を楽しむ人びともいれば、潮騒を子守歌にしながら育った人たちもいます。妙高高原のあたりへ行くと「浜の衆はなかなか…」と言われたことを記憶しています。また言葉も関西弁に近い地域や高田のような標準語に近い所もあります。そのように気質や思い、生業も違って、一つにくくるには難しい特徴のある地域であると言えます。

この上越圏域は県全体の十七％の面積、十二％の人口、製造品の出荷額も十六％を超えますので、いろんな面で新潟県の十五％を米山から西のこの地域が保有し、担っているということになります。

それは一方で、県民二百五十万の五十％を下越地域が占め、米山から西の上越地域は県行政の中心から遠い地域であり、県庁は遠いなということになります。

十数年前に、新潟から離れたこの地域の足踏み状態を打破し、新しいエネルギーを起こそうと、例えば〈長野県上越市〉としたらどうか、海岸線と長野から来るラインをつなぐT字構想による交流の拠点づくりの提言、また直江津港を〈長野県直江津港〉としてPRしたらどうかなどという、非常に大胆かつドラスチックな構想が、この地域を思う人々により提案されたこともありました。私もそのころ四十歳代でしたが、上越地域のアイデンティティーは何なのかというようなことをその皆さんと真面目に議論したことを思い出します。

このこと一つとっても、この地域にはある種の気概があって、その思いのなかで頑張ろうという人たちがいるということは間違いない事実であります。それがこの地域の大きなエネルギーになっているのだろうと思います。



上越の歴史的背景

奈良時代、越後の国府*は「頸城」にありといわれました。鎌倉・室町時代には、その中心は直江津周辺に移りますが、いずれにしても上越後は越後の国の政治経済を担う大きな文化行政圏として栄えた地域で、その歴史が持っている大きなステータス、重みというものは計り知れないものがあったと言えます。

江戸時代にあっては、高田で四二町・三千戸、人口は二万人を超え、直江津も江戸の中期に三百戸、人口二千人で、この地域全体で三万人を擁する人口がありました。これは金沢、仙台と匹敵する大きな地域でありました。今日、新潟市が金沢市、仙台市などと政治や市民の賑わいを競うことになっていますが、世が世であれば高田・直江津が金沢、仙台と競う歴史の軸の上に立っていたのではとも思い巡らせます。しかし江戸時代の後半の高田藩は、窮乏著しい藩であり、公共事業・公共投資ができないほどの窮乏で、そのモットーが〈一に倹約二に倹約、三四が無くて五に倹約〉ということであったそうです。その財政の脆弱性が以後の地域づくり、人づくりの伸び悩みにつながり、歴史の軸から少し外れてしまうことになったのだと思います。

またこの地域が高田藩と直轄地が入り組んでいて統治しにくかったということもあったと思います。治めることがあっても統合力というかガバナンスが無かったという所となってしまっていたのではないかと思います。

また、この地域の賑わいと繁栄で直江津湊は、欠くことはできません。直江津湊（今町）の繁栄のことを思うと、祖母を思い出します。余談になりますが、祖母は私が小さい頃「安寿と厨子王」の話をしてくれました。祖母は森鷗外の『山椒大夫』を読んではいないと思いますので、この悲しい説話は、平安時代以来の港〈直江の津〉の歴史をずっと伝えられてきたことがわかります。港（湊）というのは物を運ぶ、人が動くという、物流人流の拠点としての機能であり、海のない地域では決して持つことのできない大きな可能性と力です。歴史と持てる機能を大切にし、それらを今後の私共のまちづくり、地域づくりの中で活かしていくということも大事なことであります。

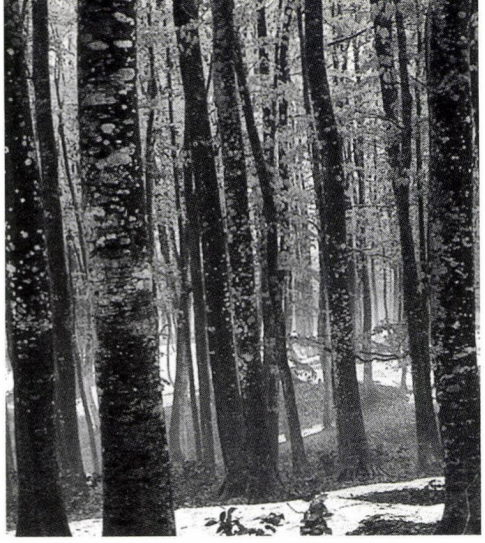
次に上越の発展に尽力された人物についてお話しします。信越線*が東海道線の全通より半年早く、明治二一年十二月に直江津から上野まで開通します。その人物のひとりが高田の豪商・室孝次郎*であります。民間で鉄道を敷設しようと地域に働きかけを始めます。時まさに富国強兵という時代とマッチして途中から国営になります。五日かかった東京へ、一日で行けるということは画期的なことであり輸送革命であります。米や人がどんどん東京へ、逆に東京からは、今日、二本木、新井、直江津にあるメジャーな化学工場が上越に新しく進出してくることになります。東京から大きな経済が上越に流れ込み、人と物が交流する大きなツールである鉄道の効果がこの地域にもたらしたものの大きさは計り知れません。もう一人は新井の実業家金子伊太郎*です。鉄道開通から二十年後、関川に発電所を造ります。新井・高田・直江津に電

＊奈良時代の国府の所在地は平安時代に編纂された「和名抄」に「越後国　国府在頸城郡　行程上二十四日　下十七日」とあるのみで位置は判明していない。上越市長者原説が有力視されている。

＊明治一八年直江津・新井間開通。二一年軽井沢・横川間を馬車輸送で上野まで開通。二六年碓氷トンネルアプト式完成、直江津・上野間全通。

＊室孝次郎（一八三九～一九〇三）越後における維新の志士・政治家、信越線開設の功労者。家財全て地域開発と政治に費やした。大隈重信揮毫の碑が高田公園に建つ。享年六五歳。

＊金子伊太郎（一八六一～一九一八）大倉村（旧和田村―新井市）の村長として矢代川の災害復旧・改修・水源調査に尽力。上越電気株式会社を設立、国友末蔵を技師として蔵々発電所を完成。大正二年高田ガス株式会社を設立。享年五八歳。



燈が灯るのが明治四十年、これは生活革命であり、当時の人びとの生活に大きな変化を与える事柄でした。輸送と電気という基幹インフラが整備されることによって、一大工業地帯に発展していくことになります。

当時、国や自治体ではなくこの地の民間の気概のある人たちが、自らの地域のために物を興し、この地域の豊かさが増し、我々が今、その恩恵を受けているんだと改めて思うところです。

地方分権と地域の力

次に地方分権と地域の力ということでお話いたします。〈地方分権〉〈三位一体の改革〉〈構造改革〉と、キーワードに事欠かない今日の政治経済状況ですが、国も県も財政破綻寸前の予断を許さない状況にまで至っております。

国・県がどうしてこういう経済状況になったかと言えば、九〇年代の初頭から、国も県も景気対策と称して地方単独事業を促進し、全国的なブームになりました。

地方交付税制度は国が集める所得税・法人税などの国税の概ね三十%前後を財源に、市町村の人口や道路の長さなどを換算して基準財政需要額を算出し、基準財政収入額との不足分を交付税として払うという制度です。地域の実情に合わせて一定のルールで配分されるという、財政調整と財源の再配分ができるこの機能は世界にない、世界に冠たる制度であったわけですが、バブル崩壊後の景気対策で、国は箱物を造ればその借金の例えば起債の七割は交付税で面倒をみることとし配分しますという制度を作ってしまいました。そのときから物を造らないと交付税は来ないという仕組みに一部変わってしまいました。

小さな町にも大オーケストラが来られるような音楽堂や美術館、大きな体育館が作られました。社会資本の充実により、日本全国各地で遍在なく都市化が進み、文化度も便利さも上がりましたが、その結果、国・県・市町村に残ったのが、国が五百兆円、県・市町村を合わせて二百兆円という膨大な長期債務です。地方・国税合わせて七四兆円の税収しかありません。地方全体の歳出は八四、五兆円になるわけですが、地方の税収は三十数兆円あるかないかで、あとは借り入れです。このような状況を健全な財政に戻すために補助金・交付税を見直し、財源を地方に渡すという〈三位一体の改革〉が出てきたわけです。

使っていく地域に近い視点で考える〈三位一体の改革〉が進むべき方向については政治家、学者、行政の中でも意見が分かれるところですが、行財政が健全化するシステムを早く作らなければ、行政も我々の生活も大きな負担を強いられることになるわけです。財政の硬直化というボディブローが相当効いてきていて、足元がふらつく状態にまでなっています。県は十六年度予算一兆二千百億円余を組みましたが、起債の償還額が二千億円を超えています。税収をみれば平成九年がピークで二千七百億を超えていましたが、現在は二千三百億円に届きませんので、税収を借金の返済に充てると数百億しか残らないということになるわけです。国も八十数兆円の内、三十数兆円を借金で賄う予算ですので、苦しいあまり、地方は今まで贅沢し冗漫な財政をしていたのだから交付税を

見直し効率的・効果的な地方財政に戻してもらうという国の方針で、予想以上に、前年比十二％も交付税がカットされました。十二％は県の予算において四百億円くらいのカットという大変なことになりました。こんな財政状況でさらに起債・借金が増えるということは、子ども達や孫達に負担を強いることになるのも事実です。

合併について

平成の合併は、単に市町村の問題ではないと理解しています。県民二百五十万を擁する新潟県で、平成十九年に新潟市を中心に人口七十数万人の新市が出来ます。政令指定都市になると県と対等な権限を持って行政執行できる機関になります。二百五十万人分の七十万人、三分の一の人たちを新新潟市が市民生活をまかなうことになります。県職員九千人の三分の一はどうなるのか、定員の適正化が急がれる理由の一つであります。

今回の合併には、国・県の押し付けだとか、住民の発意ではないという議論があります。しかし先ほどお話したような財政状況の中で、きちっとした住民サービスと次代につなげる地域づくり、地域と協働しながら新しいことをやって行くまちづくりということを考えた時に、我々が選択する道はどうなのかなという議論を、市民・県民一人ひとりがきちっとして行けば、おのずから結論が出て来ることだろうと思っています。

産業構造の特質と活性化

本県の建設業を例にとってお話しを始めます。建設業の事業所が県内一万八千五百社くらいあり、県全産業事業所の概ね十二％を占め、全国でも二番目くらいの高比率です。その中でも上越地域は県全体で少し高いところにあります。その良し悪しは別にして、これは新潟県の特殊性だろうとは思いますが、県全体の十二％の事業所、従業員十四万人は、その家族など全体を見れば相当なウエイトということになります。

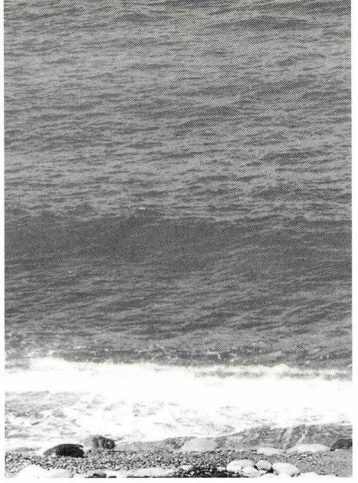
地方財政の厳しさから新しい投資よりも維持形に力を入れ、今ある施設を末長く使って行くような方向へシフトせざるを得なくなりました。また非常に苦しいジャッジでしたが、今年度、県予算で普通建設事業が十六％も落さざるを得ませんでした。この地域の大きな産業経済の支えである建設関係の仕事が潤沢に廻らなくなるわけです。変化に対して大きな決断、大きな舵を切る時には、勇気と決断が必要だと思いますが、それぞれ智恵を絞って工夫を凝らし難局を乗り切ってもらいたいとしか言いようがないのです。この地域が持つ、産業構造の持つ特質を議論し、情報を共有しながら、新しい方向を模索しながら足腰の強い企業体力をつける努力と、柔軟な対応で地域の声をあげて行くことが大切であると思います。

新しい時代に蘇る地域、都市づくり

〈まちづくり・地域づくり・人づくり〉に向けて、我々はどこに視点を置くべきかについてお話しを進めます。一つの成功例が、すべてに活かせるわけではありません。また答えは一つではありません。県として見たときの地域づくり、都市づくりを大きく膨らまして行くために、平成十二年から私も委員の一人として参加した、県の都市政策会議の中で、新しい地域を作って行く時の視点としてまとめられたものがあります。その視点についてお話しさせていただきます。

新潟県の人口は七〇年度以降ずっと減って、二〇三〇年度には戦前と同じ規模になることが予想されています。これは新潟県だけではありませんが、少子高齢化が急速に進んで行くということを念頭において、地域おこし、まちづくり、地域づくりを考える必要があるというのが一点目の視点です。

二点目は、飛躍的な経済成長が望めない中で、公共投資という官に頼ったものづくりは限界に来ている、とい



うことを頭に入れておく必要があるということです。

三番目は、たとえば河川管理などの維持管理を地域住民でやって、その財源を他の行政需要に向けるというような視点、ＮＰＯを含めた新しい発想の中で、民間企業と地域の皆さんとの主体的な取り組みを行政がサポートするような観点があるのではないかということです。

村上地域の広域行政組合によって作られたＮＰＯ法人・都岐沙羅（*つきさら）パートナーズセンターがあります。このセンターの事業として、上限三百万、下限百万円を新しいベンチャービジネスに対して支援しています。村上地区では、こういう組織を作って情報の収集・提供・共有で、地域の活性化が進められています。

四番目は自然環境の保全です。水や緑などの豊かな生活の環境を大事にし、農地が都市化されていくなかで、新しい観点で土地利用、環境問題を考えなければなりません。また、新潟県は全国平均よりも自家用車台数が多く、その分、一般公共のバス利用者が減ってきて、環境汚染度合いも高くなっています。そういうことも含めて環境という視点に立ってものを見て行くことが、地域づくりのなかで必要だということです。

五番目は、心の豊かさの実感だとか価値ある活動をしたいと考える人が多くなってきています。勤めは勤めとしながら余暇を自分の趣味やボランティアなどに使う、高校生がボランティアをすることが大学入試の要素になるなど、社会を動かして行く価値観が大きく変わってきているということです。それはニーズも変わるということですので、ニーズを捉えていない提案というのは全く価値のない提案になるわけです。新しい地域づくりのなかで、そういうことを注視しなければならないということになります。

六番目は産業構造の転換です。これが一番大きなウエイトを占めることになりますが、農業従事者が高齢化し、専業農家が減って地域の農業の生産性も下がる中で、農業をどうやって支えて行くのか。そこまではみんなが議論しますが、その後の一歩をどうやって行くかということです。現実を見るとなかなか進まない部分であると思いますが、今ほどの視点の全てで議論すべき場合や、二つの視点で、あるいは三つの要素で議論する場合など、それぞれ違う地域で、地域に合った課題に一番ふさわしい視点を取り込んで努力し、地域づくり、都市づくりを一歩一歩つづけて作り上げて行くことが、これからは求められているのだと思います。

新しい時代は、何もかもと期待することができないかも知れませんが、今よりは、もっときらきらした時代が来ると信じ、イラクのことわざにあるそうですが、

――過去は夢　未来は希望――

というように、未来に希望をもって、これからは行政と市民、住民がパートナーシップの中で課題に取り組み、解決する努力をいとわないこと、そしてそのために情報を提供し合い共有する。このことを出発点とすることが大事だと思います。

拙い内容にもかかわらず、長時間お聞きいただきましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

＊大和朝廷が村上周辺に置いたという柵。『日本書紀』斉明紀四年（六五八）に都岐沙羅柵造（つきさらさくのみやつこ）が見えるが位置については不明。

＊脚注は編集部において付した。参考・「新潟県人物百年史頸城編」／「上越市史・資料編３」



■寄稿

ライオンはみがき 創業者 小林富次郎

久保田好郎



明治40年の「ライオン歯磨」の袋

ライオン歯磨の創始者小林富次郎は、嘉永五年（一八五二）正月十五日、小林喜助夫婦の出稼ぎ先（酒造家）、埼玉県与野市（現さいたま市）で、その次男として生まれ、四歳から一六歳までの少年期を柿崎町直海浜で育った。

富次郎は、数え年二〇歳の明治四年（一八七一）、柿崎の馬場仁右衛門の四女はん子と結婚し、当初は兄虎之助の酒造業を助けていたが、維新の変動期、酒造業は斜陽の一途をたどり、先を見通した彼は別業で身を立てようと考えていた。

豚と兎の売買業

富次郎は当時流行していた豚と兎の売買業に手を出し、幸いにも事業が当たって一時は巨額の利益を得たが、その反動も大きく、いったん失敗すると最悪の状態に陥り、故郷に帰って傷心をいやすことになった。

この失敗は生涯の薬となって、再び投機的事業には絶対に手を出さないと決心した。以来酒造業からも足を洗い、後に我が国の禁酒事業家として後生にその名を刻むようになった。

使用人から支配人へ、再び使用人へ

青年富次郎は、「家運の挽回をはかるには、東京へ出て活躍することである。いかに努力しても人口の少ない郷土ではしかたがない。一旗あげるには花の東京でなければならない」と考えた。


直海浜の光徳寺に建つ顕彰碑

明治十年（一八七七）富次郎二五歳、資本もなく頼る人もない、ただ一つ意欲だけで自分の運命を開拓しようと、空手上京した富次郎は、八方手を尽くして奉公口を探し、向島小梅の鳴春舎という石鹸工場に入った。この工場は官吏・堀江小十郎が将来の日本を見通し、石鹸製造の必要性を考えて操業していたものである。

当時の石鹸製造所は東京で五、六軒しかなく、関西は皆無であった。富次郎は全精力を注いで努力した結果、次第に鳴春舎において重要視され、主人の代理人として事業を推進するようになった。二六歳のとき出資者の一人に選ばれたが、合資者として出資する資本がなく困却してしまった。しかし機会を失ってはならないと、故郷柿崎の家財の売却を兄に頼んだ。

そのとき新しい試みが行われた。これが後の広告王へのはじめと思われるが、その方法は四分板に次の文面を書き、これを竹竿に打ちつけて村内の目立つ所、二、三か所に立て広告した。

覚

一、家具競売仕候、但し今日より三日内

明治十一年十月五日　小林清蔵

この小林清蔵とは兄虎之助の改名した名前で、小林富次郎の名前では地元で通用しなかったからであろう。家財の競売は石鹸事業に投資するだけでなく、酒屋時代の負債の後始末をするねらいもあった。小林家としては断腸の思いであったが、やがて大成功する小林富次郎にとっては第一歩でもあった。何とかして故郷で資金調達ができた富次郎は、鳴春舎の出資者として経営にたずさわることになった。

鳴春舎の事業は好況の波に乗り、合資組織から株式会社（株式会社鳴春社）へ改組、堀江社長の下、富次郎は支配人として働き、事業は向上の一途をたどっていたが、株式公開後一年を前にして株主総会で、合意の上に会社を解散することになった。彼は支配人としての責任を負って、自分の一切の資産を投じて処理し、支配人だった富次郎は、再び一使用人となって働く立場となった。

再び鳴春社の一使用人として働くことになった富次郎は、国内の狭いところで競争することに疑問を感じ、横浜の貿易商松村清吉と話し合い、日本の石鹸が盛んに売れている上海に進出を計画し、現地工場で製造したほうが安価に生産できると考えたが、同邦人と競合するような事業を好まない富次郎は、計画を変更して神戸の播磨氏の鳴行社石鹸製造工場の協力者になることにした。彼は、あえて人と競うことをせず、相互協力によって新しい分野を開拓することができればと考えていたのである。その結果、彼の担当部門の石鹸部を中心に、マッチ軸木の改良にも取りかかった。

社員教育とキリスト教の信仰

当時、鳴行社には百数十人が雇われていた。当時、必ずしも義務教育が完全ではなく、非識字者が多く、人間教育も徹底していなかった。その彼等に読み書きを教え、品行の矯正を目的に夜学校を興した。これが今日の企業内教育であり、さらには技術教育にも発展した。

神戸時代のある日、耶蘇退治の演説会が行われていた劇場に入って聞いたところ、僧侶数人が演説していたが、あまりにも浅薄な論旨であった。これに対し、キリスト教演説会に参加したところ、理路整然としており感銘を受けた。これが端緒となって従業員教育にもキリスト教の教義を聴かせ、彼自身も改宗に至り洗礼を受けた。

浄土真宗の多い越後において、クリスチャンになることは、それだけ身に受ける強い信仰心が働いたものであろう。

北上川の洪水

富次郎は、マッチの軸木製造の原木を東北に求め、成功を納めていたが、しかし天災は必ずあるもので、明治二三年（一八九〇）北

上川の大洪水により木々がことごとく押し流されたばかりでなく、周辺の市町村への影響も大きかった。北上川流域の橋がほとんど流失してしまい、住民は生活の足場を失ってしまった。

彼は進退極まり、自殺を決意して北上川の橋上に立った。そのとき、牧師から贈られた聖書の一節、「新約聖書」へブライ書第十二章十一節の聖句を思い出し、聖書の教えに感謝し、死を思い止まった。

その後、彼は眼病を患い、さらに脳病も併発したがやがて回復し、小さいながらも神田柳原川岸に店を開いた。明治二四年十月のことであった。これが世界に誇るライオン歯磨の前身であった。その陰で夫人は、富次郎の療養生活の間、日本橋に小さな飲食店を開業し療養費を得ていた。



ライオン歯磨き粉の袋の裏面は「ライオン歯磨慈善券」になっており、次のような説明がある。

「此の空袋を総ての慈善事業へ御寄付成され候はば、壹枚壹厘の割合を以って本舗及支店は勿論全国の販売店に於て御買上げ申可候

便宜上袋の裏面のみ御寄付成され候ても差支え之無く候」

とある。

ヤシ油事業

小林商店の取扱商品は、牛ろう、ヤシ油、カセイソーダ、香料、軸木、塩酸カリ、赤リンなどで、播磨商店や横浜の松村商店から委託されたものであった。

明治二五年、石鹸に南洋産のヤシ油を使用することを計画、試みにヤシ油を買い入れて搾油したのが当たって、ほとんど独占事業という形で莫大な利益を得ることができた。

ライオン歯磨の発売と晩年

明治三一年（一八九八）、約一年半にわたる試験と準備のうえ、ライオン歯磨を製造発売した。予想以上の盛況で、次第に事業の拡大を図り小林商店は旭日昇天の勢いで発展した。

しかし、明治三二年二月に妻を病で失い、三三年には自らも腸チフスに罹り、幸いにも回復して再起することができたが、それ以来、慈善事業の援助のための慈善券発行、禁酒事業や商業道徳高揚運動など多くの社会事業への協力に努めるようになった。

多くの苦難の道を乗り越え、鋭い洞察力で数々の事業を成功させた富次郎であったが、晩年は伝道やキリスト教成年会などの社会活動に重点を置き、明治四三年十二月十三日、東京の自宅で五八歳の生涯を閉じた。

附　記　本稿は他誌に掲載したものを本誌のために改稿した。

参考文献　柿崎町史編さん会『復刻版 柿崎町史』（名著出版　昭和四八年）

■筆者　上越市史編纂室長



●新潟県初の登録文化財●

先人の知恵と苦労を今に伝える最古の砂防施設

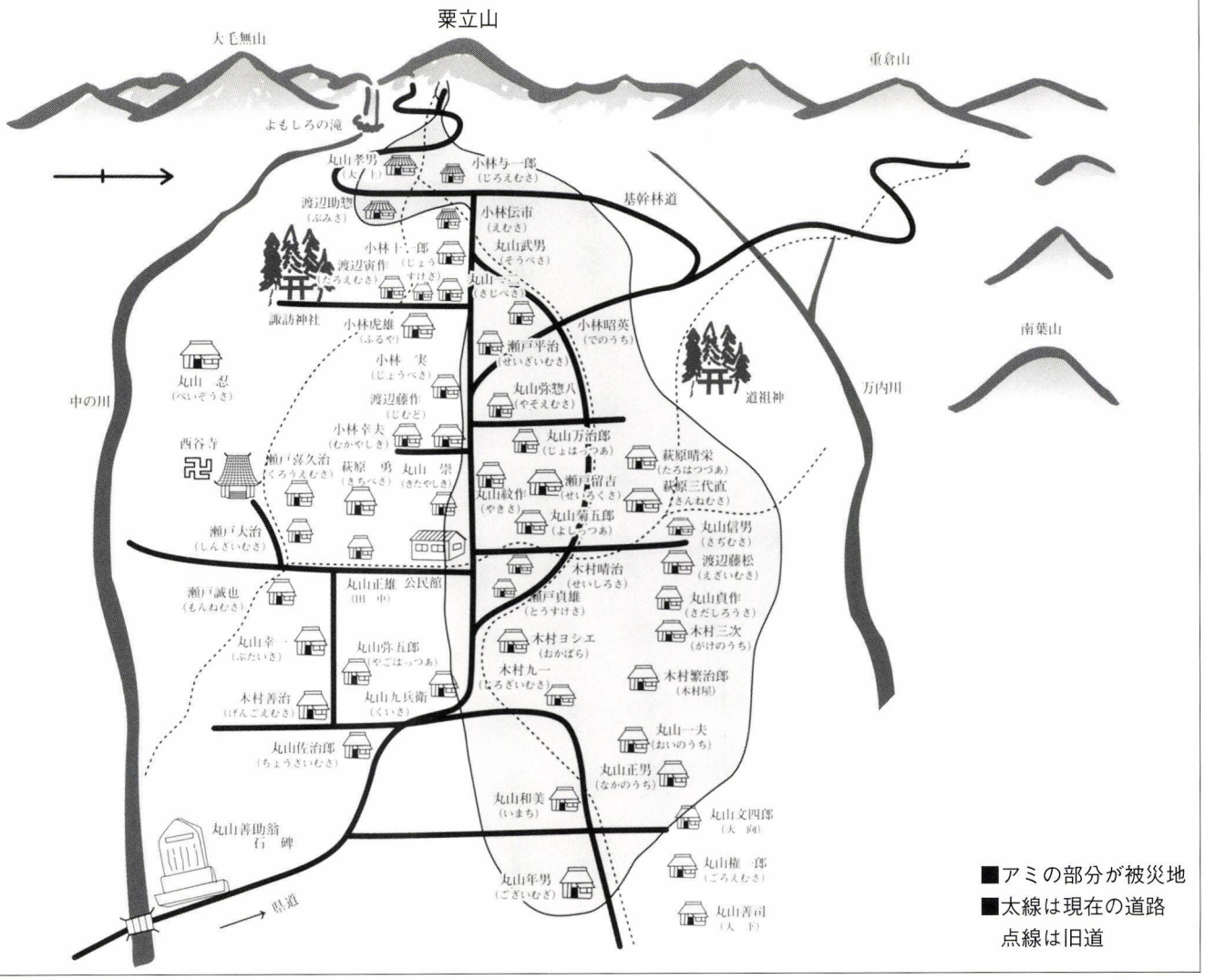
万内川石積み堰堤群
日影沢床固工群

ばんないがわ いしづみえんていぐん
ひかげさわ とこかためこうぐん

新井砂防事務所歴史研究会　後藤正弘



粟立山「山のげ」の被災図



豊かな自然と災害の脅威

直江津から、国道十八号線を長野方面に車を走らせ「道の駅あらい」を過ぎると、山里に春の到来を告げる妙高山の雪形「跳ね馬」と新緑につつまれた矢代川の清流が眩しく目に飛び込んでくる。

矢代川中流域に発達した丘陵には、田園風景が広がり、清流と緑豊かな自然に恵まれている。しかし、山麓は万内川や御備川など急峻な渓流が集まり、古くから自然の猛威に脅かされ続けた地域でもある。

百年前に、粟立山麓・西野谷地区を襲った土石流のことを知る人は、今は少ない。

未曾有の大災害で、ほとんどの家や田畑を土砂で埋めつくされた人々は、悲嘆にくれた。しかし、この大惨事がきっかけとなり、地元民による治水・砂防の重要性を訴える運動となって発展し、やがて国や県を動かし新潟県砂防事業発祥の地となっていくのである。

明治の「山のげ」

この地域では、山の崩壊を「山のげ」と呼び恐れていた。粟立山には、現在も山頂付近に嫁形と呼ぶ崩壊地の跡が残り、晴れの日には遠くからでもハッキリわかる。

粟立山大崩壊による土石流被害の惨状は、当時区長であった丸山峯吉と丸山庄作の記録



惨状を記録する唯一の写真

に克明に残されている。

当時の記録から「山のげ」があったのは、一九〇二年（明治三五）五月十七日、粟立山山頂（標高一、一九四メートル）で大きな地すべりが発生、大量の雪塊を含んだ土砂が万内川上流を堰き止めた。

自然のダムは、二日後の十九日午前八時頃突然大音響とともに破裂した。翌日になると、更に大きな山津波が樹木を薙ぎ倒しながら凄まじい勢いで西野谷地区の家屋や田畑の大半を埋めつくしていく。

しかし、未曾有の大災害にもかかわらず、人的被害は死者一名だけであった。山の異変に早くから気づいた村人が、昼夜の監視を続け、事前に村民を一斉避難させたからである。

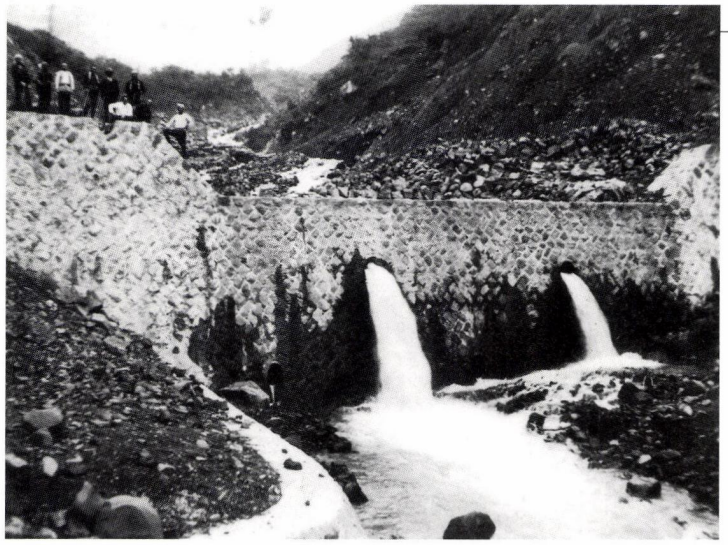
このように早くから前兆現象を察知し、迅速に安全な場所に避難するという先人の知恵は、現在の防災に通じる貴重な教訓となっている。

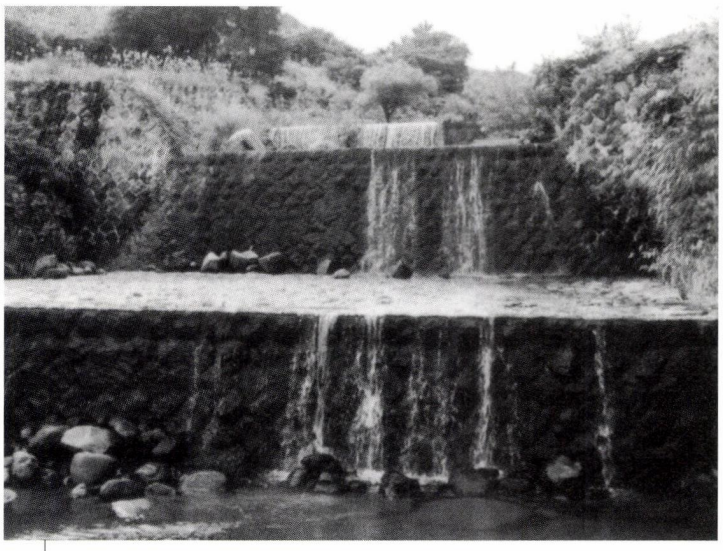
その年は天候不順が続き、隣村から余り苗を譲ってもらい、残ったわずかな水田に稲を植えつけたが、実りは少なかった。炭焼きでかろうじて生計を営んだと記録されている。

砂防事業のはじまり

「平野を治めんと欲すれば、山と川を治めよ」は、粟立山大崩壊のあと、その生涯をかけて治水・砂防事業の発展に尽力した矢代村長、丸山善助の言葉である。

砂防法の成立は一八九七年（明治三〇）であ





大正10年から現在までに造られた万内川の堰堤は18基を数える。これらは現地産の石を使った石積堰堤で、その組み方はきわめて精巧で、周囲の自然環境と調和した美しさと技術の高さがうかがえる。80年の歳月が流れた今でも、現役として機能している。このうち11基が文化財登録として登録された。

上　一号堰堤
粗石コンクリート造の砂防堰堤として我国初期の事例。

下　七・八号堰堤
七号堰堤の上流右岸には灌漑用水の取り入れ口がある。取水堰堤の機能を有する少ない例。

る。まだ限られた地域でしか砂防事業は行われていなかった。新潟県の片田舎で発生した災害など、話題にもならなかったのであろう。

この時代の災害復旧は、地元の労働力と資金によって細々と行われていた。その後、幾たびも土砂災害に苦しめられたため、国・県による治山・治水事業への期待は大きく、地元民によって、熱心に陳情が繰り返される。ようやく万内川に、待望の石積堰堤（第一号から第三号）を着手したのは一九二一年（大正一〇）である。実に大崩壊から二四年の月日を経ていた。

建設機械など無い時代、現地の巨石を三十センチ程度の立方体に割り、隙間を埋める砂利も原石をハンマーで砕いて使用した。堰堤の付近で作られた材料は、モッコと呼ばれる網目状の籠に棒を通し、この棒を前後で担いだり直接背負子（しょいこ）で運搬した。

砂防堰堤の組立は、まず堰堤前面、裏面に割石を菱形に組む谷石積工法で、一定の勾配に石を組む。次にその間に玉石を入れ、隙間には砂利を詰める。計画された高さにまで石積みが立ち上がると、最上部にすべて割石を敷き詰め完成させた。

堰堤の築造は、ほとんど地元民の労力によるもので、男衆は石割や石組み、女衆は砕石づくりを分担した。炭焼きと農業で細々と生業をたてていた人々にとって貴重な現金収入でもあった。





日影沢の石積床固工群の特徴は、わずか1.2kmの急峻な渓流に47基もの床固工群が設置されていることである。また、日影沢の支流のクズレ沢には非常にめずらしい石張りの斜路工が残っている。偶然にも最近発見されたもので、現地の石を切りだし、精巧に組み上げた手作りの施設には先人の知恵と苦労がうかがえる。

上　日影沢中流域床固工
30度の傾斜に32基の施設が地形にあわせて造られ、自然と一体化している。

下　クズレ沢斜路工
周囲の景観に溶け込み、新たな渓谷の自然景観を創出している。

＊床固め＝河床などを石やコンクリートで強化すること

新潟県初の砂防文化財へ

砂防事業が着手されてから八十有余年の月日が経過した。万内川や支流日影沢に現存する砂防施設は大小あわせて、七九基ある。長い歴史の中で、災害により破損、流出しながらも、修繕や補修を繰り返し維持してきた。これらの施設はいずれも石を組み合わせて造られており、その組み方はきわめて精巧なもので、自然環境と調和した美しさと技術の高さがうかがえる。そして、今でも土砂を堰き止め、土砂災害から村や町を守り続けている。

近年、建造物の価値が文化庁からも認められるようになり、二〇〇三年（平成一五）に万内川と支流日影沢の大半の施設が、新潟県内で初めて登録有形文化財として登録された。これまで評価されることのなかった砂防施設が、貴重な文化遺産として村人の歴史とロマンを秘めて今注目されている。



登録有形文化財とは

文化財保護法により有形文化財、無形文化財、特に重要なものは重要文化財などに指定し、保護されてきたが、最近の社会情勢の変化で文化財が社会的評価を受ける前に消滅する危機的な状況にあり、築造後50年を経過した貴重な建造物を幅広く後世に継承するため、平成8年度につくられた制度。

この制度の考え方は、身近な建造物であっても、再び造ることのできないものなどは、立派な文化財であり、これら文化財を資産として活かすとともに、活用しながらゆるやかに守ろうというもので、対象となるものは、建造物、住宅、事務所、寺社などはもちろん、橋、水門、トンネル、煙突など幅広く数多くの文化財を対象にしている。

基準としては、築後50年を経過している建造物で、

・国土の歴史的景観に寄与しているもの
・造型の規範となっているもの
・再現することが容易でないもの

となっている。

広く親しまれ、そこでしか見られない珍しい形をしているものなどが、その資格を持つ。



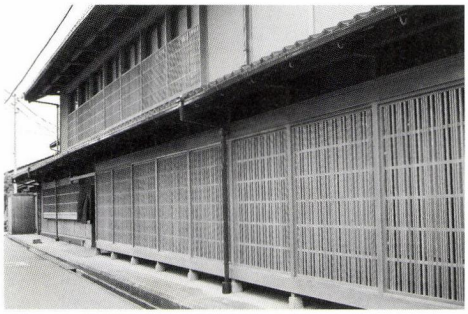
万内川砂防公園
砂防や環境学習レクリェーションの場として整備されている。

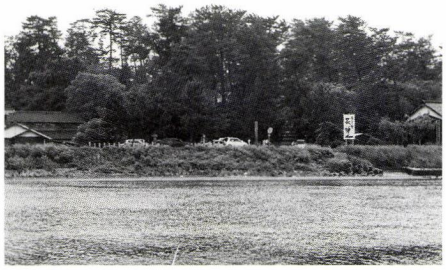
カメラの眼



安宅関　小松市

北陸自動車道小松ＩＣから間もなく。「勧進帳」の名場面の銅像が松林の中に立ち、海に面してレストハウスもある。同じ砂丘上の安宅住吉神社には「人生の難所、難関突破」のお守りが売られている。「智仁勇」の題字は、弁慶の知恵、富樫の仁、義経の勇を表している。像のモデルは七代目松本幸四郎、二代目市川左団次。写真下は安宅の古い家並と梯川（かけはしがわ）の河口、安宅の渡から望む安宅関。





如意の渡（にょいのわたし）　高岡市・新湊市

氷見線伏木駅の近く。小矢部川畔に弁慶が義経を打擲する銅像が立つところが「如意の渡」である。対岸の新湊へ写真のような渡し船が通っている。義経一行は放生津（新湊）の町から奈呉の松原をぬけ岩瀬へ、そして直江の津へと向う。



如意の渡　新湊側から伏木を見る



義経記・笈探し・安宅・勧進帳

源義経の一代記「義経記」のなかでも、兄頼朝の追求を逃れて、一路奥州平泉を目指して落ちていく北陸道の物語は劇的な場面の連続である。

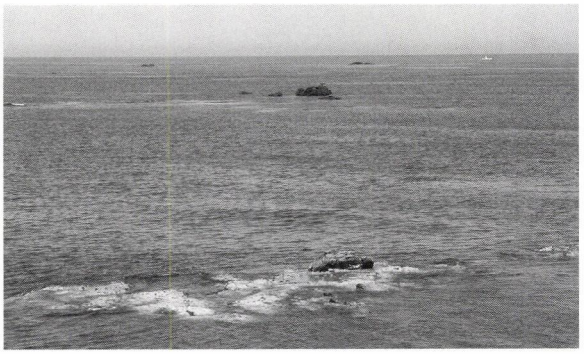
「安宅の渡」を越えた義経一行を残し、弁慶が単身、富樫館へ乗り込み「勧進は如何様に候べき」と脅して勧進を受ける。続いて「如意の渡」で渡守に怪しまれると、弁慶は、義経を船端から引きずり下ろし「お前のためにあちこちで怪しまれる」と、散々に扇で打ちのめす。ようやく六渡寺（ろくろくとじ）から放生津（ほうしょうず）に渡り、奈呉の林で義経・弁慶の主従が袖を取あって涙する有名なシーンになる。

いよいよ直江の津。宿所の花園観音堂を取り囲んで詰問する浦人に、義経一人で必至に防戦していると、慌てて戻った弁慶と浦人との間で、笈の中身をめぐって緊迫の問答が繰り広げられる。揚句、多額の金品を浦の代官から取り上げ、一行は、直江の湊から船に乗り込んで平泉目指して落ちていく。

このようなエピソードが重なって幸若舞「笈探し」・能「安宅」・歌舞伎「勧進帳」が生れたものと思われる。その安宅、放生津（奈呉之浦もある）はともに河口の湊町であり、迷路のような小路が走るのは、直江の津とどことなく共通していて不思議な気分になる。

かつて、五智・浜善光寺・観音寺と巡る観光コースがあり、観音寺の許可のもと「兜最中」が売り出され、人気の菓子であったという。しかし、カメラの眼で覗いても、わが〈直江の津〉はどこにも何も見えてこない。僅かに観音寺がひっそりと物語を伝えているだけである。





花園の観音堂
直江の津へ入る前に弁慶が休んだという「岩戸の崎」の岩も今は海の中になった。花園の観音寺には、義経奉納の掛仏や兜を投げ込んだという兜池が残る。

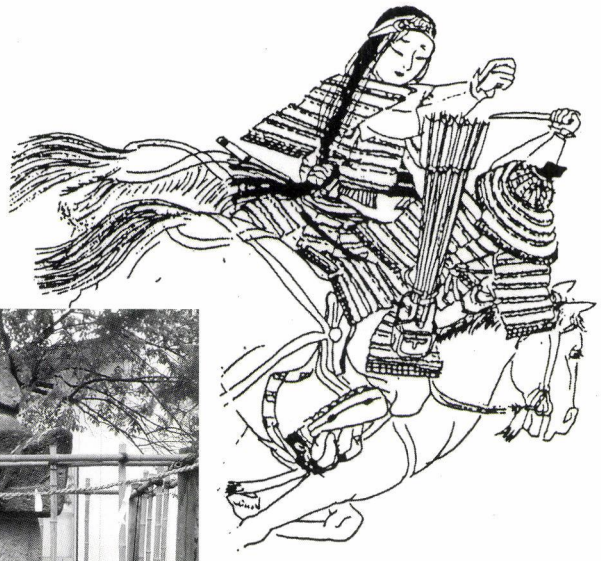


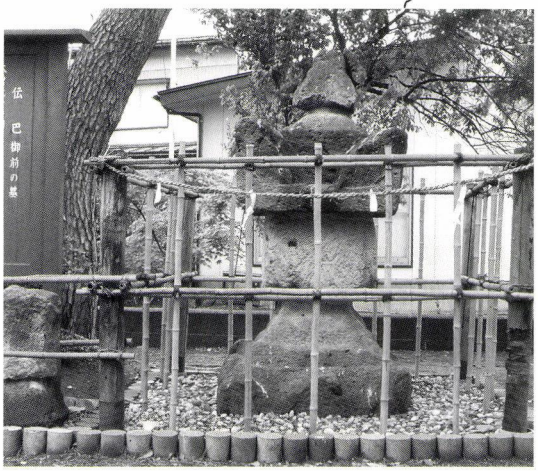
奈呉の松原のある放生津八幡

ひろば

巴御前を守った光源寺の祖・堀徳兵衛

三田村優





木曽(源)義仲

木曽義仲は久寿元年（一一五四）、源義賢の二男として生まれました。幼名を駒王丸（こまおうまる）といい、二歳のとき、父義賢が甥の悪源太義平（あくげんたよしひら）に殺されます。

義平の兄弟には頼朝・義経がおり、義仲とは従兄弟同士、義平の父義朝は義賢の兄という関係にあります。駒王丸も危なく殺されるところを斉藤別当実盛に助けられ木曽（木曽福島）の豪族中原兼遠（かねとお）に預けられて養育されました。

義仲の挙兵

治承四年（一一八〇）義仲二七歳のとき、以仁王（もちひとおう）の「平家追討」の令旨を受け挙兵します。このとき同様の令旨を受けて源頼朝も挙兵しています。

義仲を養育してきた中原兼遠には三人の子があり、後に巴御前といわれる娘の巴は義仲の側室（正妻は山吹という）になっていましたが、義仲の挙兵に際して兼光（樋口）と兼平（今井）の二人を加勢させました。

国府の豪族堀徳兵衛

木曾義仲は、朝廷の御牧（牧場）「望月の牧」（長野県望月町）の近くに軍馬と兵を集め、翌養和元年（一一八一）、千曲川畔の横田河原（長野県篠ノ井市）で平家方の越後の豪族城長茂の大軍を破り、一気に越後国府へ進撃し、このとき、後に光源寺の開祖となる国府の豪族堀徳兵衛光政が義仲の家臣になりました。

寿永二年（一一八三）五月十一日、兵五万の木曽軍は越中倶利伽羅峠で、牛の角に松明を結びつけ夜襲をかける、有名な「火牛の計」で平維盛軍十万を破って七月には念願の京都へ入り、翌年、征夷大将軍となりました。その日の出の勢いから「朝日将軍」と呼ばれました。

義仲大津で討死

義仲は、元暦元年（一一八四）十月五日、鎌倉の源頼朝の命で攻めてきた源義経・範頼軍に敗れ、近江の粟津（大津市）で戦死しました。上洛して半年、義仲三一歳のときでした。

清和天皇----源　義朝
- 義平
- 頼朝
- 範頼
- 義経

義賢
- 義仲

中原兼遠
- 樋口兼光※
- 今井兼平
- 巴

※樋口兼光の子孫－永享の乱(1438)に上杉憲実に従い越後に攻め入る。小千谷市北山の領主（35年間）。その後、樋口氏は六日町坂戸城長尾氏に仕え、子孫の樋口兼続は長尾政景の近習となった。後に直江家を継いで直江兼続と名乗り、上杉景勝の家老となる。
魚沼の樋口氏はこの系統で、明治の小説家樋口一葉がいる。

義仲の戦死で木曽軍は総崩れとなり、家来は故郷目指して逃げ戻り、堀徳兵衛光政も巴御前や兼光・兼平兄弟とともに越後国府をめざして逃げましたが、糸魚川まで来たとき、木曽は残党狩りが厳しくて戻れないことが分かり、兼光・兼平と堀徳兵衛はここで分かれ、巴御前は徳兵衛について越後国府へと向かいました。

巴御前と義仲寺

巴御前は、はじめ徳兵衛の世話で国府の尼寺にかくまわれていましたが、やがて人目につかない高田の菩提ケ原へ移り、ここで義仲の菩提を弔っていました。その間も義仲の忌日には密かに大津まで出かけて菩提を弔っていました。

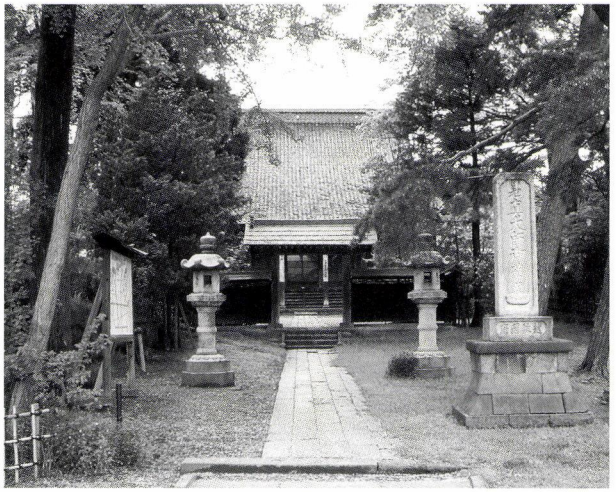
義仲最期の地に巴御前が建てた小さな草庵は、やがて義仲寺と呼ばれるようになり、後に松尾芭蕉が巴御前の心を哀れんでしばしば訪れ「無名庵」を建て逗留していました。松尾芭蕉は遺言で、義仲の墓の傍らに葬られました。以来この義仲寺は俳人の集まるメッカにもなっています。

今、上越市南城町四丁目の通称出丸の稲荷社（三長史稲荷）に巴御前の墓（タイトル写真）といわれるものがありますが、この墓石はかつて菩提が原と呼ばれていた高田城本丸地内にあって、築城の時に外堀の外側のこの地へ移されたものだといわれています。

堀徳兵衛光政と光源寺

故郷越後国府へ巴御前と共に逃れてきた堀徳兵衛光政は、専修念仏停止（承元一＝一二〇七）の弾圧で越後国府に配流の身となった親鸞に帰依し、覚円坊最信という名前をもらい弟子になりました。

親鸞が関東へ旅立たった後、覚円坊という小さなお堂



光源寺



義仲寺（左手前が義仲の墓）



芭蕉の墓

行く春をおふミ（おうみ）の人とおしみける　芭蕉

木曽殿と背中合せの寒さかな　又玄

を建てました。これが光源寺の始まりです。

長享二年（一四八八）に始まった加賀の一向一揆は、その後九〇年余りの間、加賀・能登一帯に続きました。永正三年（一五〇六）九月十九日、この制圧に進軍した越後守護代長尾能景（上杉謙信の祖父）が能登の般若野（石川県七尾市）で戦死しました。訃報に接して、父に代わって守護代となった為景（謙信の父）は、「掟書」を作って永く一向宗（浄土真宗）を越後から追放しました。このとき多くの一向宗の寺は信濃や加賀へと逃れていきました。

覚円坊（光源寺）は、このとき国府から虫生村（上越市）へと避難しましたが、さらに一向宗への弾圧が強まり、永禄二年（一五五九）一月、第八代恵最は船で能登へ逃げることにしました。一行は越中の氷見に上陸し、その年の暮れに荒山峠を越えて越路村来木野（石川県鹿島町久乃木）へと落ち着きました。

永禄九年（一五六六）上杉謙信は、本誓寺超賢に命じて覚円坊に越後への帰国を許しました。元亀元年（一五七〇）円覚坊第八代恵最は、子の智教とともに能登から虫生村へと戻りました。しかし、長男の正覚はそのまま能登の来木野に残りました。

このことについて、虫生村に次のような伝承があります。

「ある日、能登から来たという若者がいつまでも立去ろうとしなかった。この様子を見ていた西前崎の家の者は、若者を家に入れ食事などを振舞った。やがてこの若者が覚円坊第九代となった」

というものです。これは第九代になる智教が一行に先立って様子を見に来たものと思われます。

その後、覚円坊は宝永四年（一七〇七）に国府に移るま

で一三七年間も虫生村に居住しました。その間に「堀」から前崎家の「前」の文字を加えて「堀前（ほりさき）」姓になりました。

天正三年（一五七五）覚円坊第十代浄亮に、本山第十二代教如から本尊・名号と寺号「光源寺」が贈られ、覚円坊は光源寺と改名し、浄亮は「中興の祖」と呼ばれるようになりました。

一方能登では、残った長男正覚が正覚道場を創設し、一向宗の普及に努めました。これが能登光源寺の前身で、三世了賢の時代になってようやく寺院としての体裁を整え、越後光源寺の分家寺であると公表するようになりました。

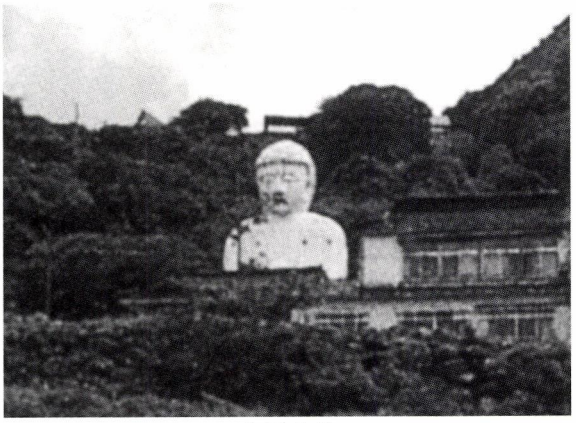
その後、能登光源寺は羽咋市に移り、今も地域の信仰をあつめる寺として、また越後の光源寺の兄弟寺として交流しています。

文禄二年（一五九三）十月十日、虫生村で地滑りが発生し、人家十二戸と光源寺もその下敷きになりました。このとき第九代智教が死亡しましたが、第十代浄亮は助かり、世話人の勧めで旧地の国府へ戻ろうと思い立ちました。しかし、

「国分寺が旧光源寺屋敷跡を勝手に使っているので返してほしい」

と、国分寺と土地争いになり、元禄十五年十二月二二日に地元有志の仲裁によって和解が成立しました。

享保十八年（一七三三）、光源寺第十六代恵雲へ東本願寺第十七代真如から「御影」が贈られ、このときから光源寺は「国府御影堂（みえどう）」、「国府御坊」と呼ばれるようになりました。


白馬大仏

巴御前の兄兼平と白馬大仏胎内の仏舎利

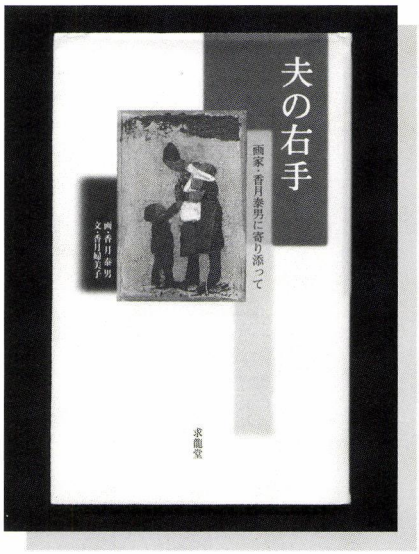
姫川温泉郷のシンボル白馬大仏は、糸魚川市姫川渓谷の白馬温泉にあり、高さ二三・五メートル、白セメント製で白毫と眼は地元産のヒスイ、唇にメノウを使用し、胎内は五階になっていて最上階に仏舎利が安置されています。

曽義仲軍の侍大将今井四郎兼平が戦死者供養のため、石山本願寺で僧侶となり、仏舎利を拝領して糸魚川の根知谷に隠れ住みました。やがて信証寺兼平と号し、根知谷に仏舎利を寺宝として信証寺を建立しました。時代は流れ、信証寺は廃寺となりましたが、仏舎利は金平（兼平）家の家宝として密かに祀られてきました。

下って大正三年、根知谷の大火で金平家も焼け、多くの寺宝や古文書類が消失しましたが、幸いにも仏舎利だけは火災を免れ、昭和四四年白馬温泉を開拓した白馬観光ホテル社長金田義孝氏がこの仏舎利を祀る白馬大仏を温泉地内に建立し、以来人々の信仰をあつめることになりました。

■筆者・上越市五智三－八－九

■読書びと



夫の右手
画家・香月泰男に寄り添って

画・香月泰男
文・香月婦美子

求龍堂刊
二二〇〇円

寺泊の海を見下ろす高台の相澤美術館に車を走らせ、ただ一点の「カーネーション」のパステル画に逢うのを楽しみにしてきた。五八年に香月泰男が描いた真紅の花である。

―画家・香月泰男に寄り添って―と副題された『夫の右手』は一九九九年三月に求龍堂より上梓された。「主人が、生まれ育ちそして生涯離れることのなかったここ三隅は、山口県の日本海側の小さな町です。家の前には三隅川が流れ、川を横切って山陰本線が走っています。そして裏には日本海からの北風をさえぎるように小さな久原山が丘陵のように横たわっています。主人が昭和四十九年三月八日に六十二歳で亡くなりましてから二十五年になりますが、主人が愛し、そして描いた三隅の景色は、いまもあまり変わりはないようです。」という書き出しの語り口がこの本のすべてを物語る。

香月婦美子は一九一七年山口県吉敷郡秋穂に生まれた。下関高等女学校を卒業後保母となり、三八年香月泰男と結婚、翌年から年子で長男長女次女を、香月がシベリヤから帰還後に次男を出産する。婦美子の母を加えての七人家族が、幼いころから家庭に恵まれなかつた画家に創作の拠り所を与え、酷寒の地で飢えと強制労働を強いられた抑留体験を五十七点の〈シベリヤ・シリーズ〉として結実させる。戦闘やスターリン獄に斃れた死者も列する鎮魂と怒り。

「主人の喜びが、わたしの喜び」という婦美子が、幽明界を異にして、画家との日常を綴った珠玉の画文集『夫の右手』は、連作〈母子のシリーズ〉で飾られる。カバー画の「母と姉妹」や「父と子」「砂遊び」等の、我が子を抱く若い親を写す三十点の小品は六人の孫をモチーフとする。「邪魔をされて仕事にならないから孫を描いてもとをとってやる」と照れたという言葉が、不器用な生き方の末に得た至福を表している。

香月泰男は一九一一年に誕生、東京美術学校在学中から国画会に出品、同人となる。郷里で美術教師を勤めながら画壇に注目されるが四三年召集され渡満、敗戦後捕虜となるまで、ホロンパイル高原ハイラル市で野戦貨物廠営繕係として軍務につく。大工や職人にいろいろ教えられて上手になった業が、晩年の〈おもちや〉と称した人形や動物の小造形（金属や木片の廃材による）に結実する。また軍事郵便葉書で家族に送り続けた三百余通の絵手紙は『海拉爾通信』として愛の絆の証となった。画家は右手がもしだめになったら、と訓練のために手紙もふにゃふにゃした左手書きだった。大切にしていた手への妻の記憶が、書名に刻まれている。

『夫の右手』は、香月が生前夢見ていた個人美術館の、いま成った貌を天上の夫に語りかける報告書ともなっている。三隅の山が見渡せる丘に建ち、外壁にシベリヤの死者のレリーフを抱く美術館は、建築に進んだ二人の息子の設計である。何よりもアトリエが移築され、描きかけの絵はもちろん、生涯旅を愛した画家の思い出の品々、飲みかけの酒や日用品、工具など、壁一面に飾られ貼られた遺品が心筋梗塞で急逝したその日のままに再現された。

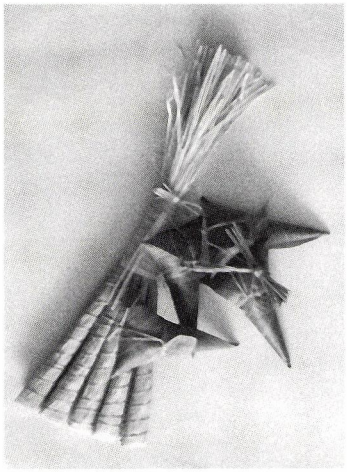
画稿帳に遺された「ものを動かす本流は／平凡と言はれるやうな生活に耐へ得る／人間の力から生まれてくるのではないかと思ふ」「わたしは国より　家族のはうが大切であると思ふ」という香月のことば。

生誕の地という以外に画家の心象風景と心通わない、わが街の〈古径ワールド〉構想にどこまでも付き纏う違和感を検証する為にも、一人の男の生き方とそれを形にした三隅町立香月美術館の在りようは重い課題を問いかけるのだ。

九月二五日から金沢に巡回する香月泰男の回顧展を今から楽しみに待っている。

（辛）

海西 東陸



柱　のきずはおととしの五月五日の背くらべ――やっと羽織の紐の丈、と言われても、意味の分からない世代の方が多くなっているし、学校でも歌っていないかもしれない。しかし、ここは学校唱歌（これも死語？）の話しではなく、〈ちまき〉の話しである。

この歌の兄弟が食べている〈ちまき〉を読者はどんふうに想像されただろうか。筆者は、二枚の笹の葉に糯米を詰めて蒸した、正三角形または長三角形のあれである。しかしなぜ、端午の節句にあれを食べるのか。あれを食べながら柱の前に立って身長を測る兄弟の姿など、どうしても想像できない。柏餅ならまだ想像はつく（柏は新しい葉が大きくなるまで前年の葉が残るので、子どもの成長を見守るという意味があるそうだ）。

まことに恥ずかしながら、この〈ちまき〉が、どうも別物だということが分かったのは、最近のことである。

茅　（ちがや）で糯米粉を包んで、すげ紐などで巻いて蒸した餅で〈粽〉と書く。五月五日に食べるのは、その日、汨羅（べきら）に身を投じた屈原（くつげん）の霊を慰めるため、粽を汨羅に投じるという中国の故事に倣ったもので、それが厄除けに転じたのか、京都祇園祭の山鉾から撒かれるようになった。

さて、それでは私たちが通常〈ちまき〉と言っているのは何ものなのか。〈笹まき〉あるいは稀に〈笹ちまき〉いう。このあたりは〈ひしまき〉と言い、その中でも正三角と長三角でまた呼び方が違ったようだが、そのようなことを伝えるお年寄りもいなくなってしまった。米を詰めるのにはコツがいるため、なかなか一般家庭で作られることもなくなったが、近頃は、総合学習の一環として子ども達が作ったり、地域起こしの体験参加で作られる事が多くなった。また笹団子に代わってみやげ物にも注目されはじめている。

いつものことながら、地域性を見てみると、米を詰めて蒸す形式が東北方面に多く〈笹まき〉として、括弧つきで〈ちまき〉と言っているところも多い。西の方は、糯米を笹で巻くものが主流だが、笹まきとちまきの混用がある。

主　題からそれるが、山形県の庄内地方では、楢を燃やした灰汁に糯米を一晩浸してから蒸すと、黄金色の笹まきができるそうだ。山北町でも同じことがやられており、庄内の人は、越後の楢の灰汁でないと良くないと言っているのがおもしろい。

さて、『頸城郡史稿』に、端午の節句の風俗として「柏餅・粽・菱巻〈餅米ヲ笹ニ包ミムシタルモノ〉等ヲ製ス」とあり、明治初年にはまだ別物だったことがよく分かる。つまり笹まきとひしまきは同じ物であり、ちまきが何時かどこかで混ざり合ってしまったらしい。（会津では今でも〈ひしまき〉と言っている所がある）。

考えてみれば、歌の〈粽〉を理解できたのは、ごく一部の地域の人だったはずである。わが地域ではいつ頃から、どのような理由で〈ひしまき〉や〈笹まき〉が〈ちまき〉になってしまったのか。画一的な中央集権的（？）な「唱歌」のおしつけのせいなのか。

（混）

歴史の風景



左　発掘された海獣葡萄鏡
左下　発掘直後の現場
右下　新しい子安の風景





平成六年（一九九四）の夏の暑い日、関川東岸の上越市子安で宅地開発に伴う発掘調査中、九世紀後半と思われる溝の中から一枚の銅鏡が忽然と現れた。

直径一四・二センチ、葡萄唐草文と五匹の海獣が配され、その中央で蹲る獅子には紐を通すための穴が開けられている。さらに、その外周を八羽の鳥が舞う。

海獣葡萄鏡である。

同様の鏡は、高松塚古墳や福岡県沖ノ島の祭祀遺跡などで出土しているが、それら国内出土例のうち四番目の大きさだという。当初、国内で複製されたものと考えられていたが、唐からもたらされた鏡である可能性が強くなった。

本長者原・今池・子安周辺を奈良時代の越後国府の地とする説が有力だが、古代、祭祀や権力を象徴する鏡、それも渡来の鏡が、何故この地にあり、百年も隔たる平安時代の溝に、投げ捨てられるようにして埋まっていたのか？

平成十一年、新しい住宅街が出現し、ショッピングセンターやファミリーレストランが建ち並び、近くには県立中央病院、老人福祉施設もでき、かつての田園風景は一変した。

海獣葡萄鏡／子安遺跡出土／上越市指定文化財
（上越市埋蔵文化財センターで見ることができる）
参考資料『上越市の文化財』上越市教育委員会

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

＊創刊三年を迎えて、多少リニューアルした。そのため、二〇〇四年春号を休刊とし、年内に増刊号を発行する予定である。ご了承いただきたい。

＊安宅関も如意の渡も写真のような立派な銅像が立ち、もう少しＰＲしてもいいのにと思えるくらい遠慮がちではあるが、「勧進帳」や「義経記」の世界を目に見える形にしている。翻って、わがまちはどうか？

＊来年のＮＨＫ大河ドラマは、宮尾登美子脚本の「義経」だという。それにかこつけて付け焼刃で何かやっても失敗するだけだと思うが、それにしても何もない。我々は自らのまちを「発見」しようとする意思を持っていないのではないか、と思う。

第４巻２号　９月１日 発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第四巻一号　通巻十三号
発行日／平成十六年六月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成十六年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)